



療育手帳の向こう側

7. 迷惑

坂口 伊都

はじめに

今回は、内の声に焦点をあてて書きました。困難に立ち向かうために笑顔で「大丈夫」と言い続けたいと己を奮い立たせられない母から「大丈夫」という言葉だけを鵜呑みにすると本当に困っている人へ支援が届かなくなってしまうと教えられました。言葉だけでなく、目の動きや表情、肩に力が入っていないか等、その方全体から内の声に心を傾けていく姿勢を忘れないよう心がけていきたいです。

内の声は自分自身でも気づきにくいものです。例えば、最近よく眠れない、何かモヤモヤしてスッキリしない。仕事もしているし、家族や友人とのトラブルもない、これと言った大きな悩み事があるわけではないが、何故か気が晴れないというような事はないでしょうか。いつからこの状態になっているか振り返ってみると、知人が転職をした知らせを SNS で見てからだ気づき、自分はこのままの生き方でいいのか、以前から漠然と感じていたけど正面から向き合っただけでこなかった事柄に知人の転職を知ってから急に焦りとなって表に出てきたという事もあるでしょう。人の変化は自分自身よりも、周りの方がよく見えていることもあり、何か元気なくて、しんどそうに見えるけど大丈夫？」と声をかけられても、何かあっても他者に伝えられる言葉が出てこなくて大半の人が「大丈夫です」と答えてしまっていないでしょうか。

療育手帳の判定場面で非該当になる時、この子は大丈夫だろうかと気がかりに感じます。療育手帳の判定は全体の発達指数をもとに行われており、一定の基準がを超えると非該当になります。支援学校高等部に通っている子が非該当になると、就職活動に影響が出て困ってしまう。その一方で、非該当

になり「療育手帳卒業ですね」と喜ばれる親御さんもいます。

非該当になった時には必ず、

「今回非該当になりましたが今後、療育手帳に該当するのではないかと感じた時は新規申請になりますが、申請することができます。」

とお伝えしています。非該当になってもグレーゾーンと呼ばれる範囲にいる場合、その子の特性に合わせた関わりを継続していくことが求められます。非該当だから特別な支援は必要ないと思ってしまうと、先生や友達が言っていることへの理解が難しくなり、自分はダメな人間だと己を責めたり、できないことを極端に嫌がる等が起きることがあります。逆にその子が理解しやすい方法で伝え続けるとわかったという自己肯定感と周りを頼れる力に繋がっていきます。

30人以上いる教室での全体指示で動ける子もいれば、難しい子もいます。クラスで過ごしていく際、出てくるのは「人に迷惑をかけてはいけません」という規範です。できるという前提で見ると、できなかった時にできるのにしないと、その子が悪役となってしまいます。療育手帳があってもなくても、その子に応じた伝え方を別にし続けることは、先生に迷惑をかける行為になるのでしょうか。今回は、その辺りを考えていきたいと思います。

迷惑でない

療育手帳の判定でお会いする際、知らない場所と人に出会い、親も子も緊張していることが多いので子どもに向かって、

「知らない人が入ってきて驚かせてしまったね。」

「緊張するね。」

「恥ずかしくなっちゃったの。」

等の声かけをしています。そうするとほぐれることが多いですが、たまにほぐれない子もいます。

その子は自分に話しかけられると一所懸命頷いていてくれますが、目が泳いでいます。あれ、こちらの言葉の意味わかっていない？と感じたのですが、検査者が「一緒に来てくれますか？」と手を差し伸べると「うん」と頷いてついて行きます。絶妙にあっている。わかっているのだろうか、でも目は泳いでいたしと不思議な気持ちになりました。

子どもを見送った後で母が、「保育園の先生にもっと丁寧に見てもらいたいと何度もお願いしているのですが、それなりについて行けていますよと言われて」と話し始めました。さらに、「〇〇ちゃんよりも気になる子が他に何人かいます」とも言われたそうで、「私は心配性だから」と自分を責めている口調になりました。

人手が足りない学校や施設に行くと、言う事を聞かない、手や足が出る、どこかに飛び出してしまう等の行動を起こす子どもの方に大人の手が取られ、大人しい子は手をかけることが減ってしまう。もっと手をかけたいと思っても手が回らないと嘆きの声を聞きます。

その一方で、支援者から「あの子、わかったと言ったのに、全然しないのです。本当に迷惑」という声もよく聞きます。

私も笑顔で「わかりました」と答える大人や子どもに出会いますが、何を指摘されていてどう直せばいいかわからず応じようがない様子の時があります。そうすると、「わかりました」や「はい」と相手に求められるまま返答しているとわかります。何を言われているかわからなくても返事さえすれば小言が終息するので、この苦痛な時間を終わらせられます。

また、子ども同士のコミュニティは、大人よりも辛辣な言葉を投げつけられることがあるので、わからないとバレれば馬鹿にされるのではないかと恐れ、自分からわからないとはなかなか言えるものではありません。

わからないことを言葉にできないでいる子どもの自尊心を守りながら、一緒に考える流れにするにはどうしたらいいだろうと悩みます。

「次からはどうすればいいのか聞かせて」

わかっていないだろうと推察して言うのなら、それは意地悪だなと感じます。

わかっているのだろうと答えを求めると子どもを追い込むことになります。

「わからないなら、わからないと言ってもいいよ」

ここで「わからない」と返ってきたら、次に

「どこがわからない？」と言いたくなる。

わからないことを言葉にできなくて困っているのだから本末転倒です。

「私がわからないからちょっと教えてくれる？ここって〇〇という意味であっている？」

こちらが教えてもらう立場なら、子どもの自尊心を傷つけずに済みます。尋ねながら、話の擦り合わせもできそうです。ついでに「よくわかっているね」と付け加えたら、自信を持ちやすくなるのではないのでしょうか。

目を泳がせながら頷いていた子は、大人の最後の行動を真似ているように見えました。そうすれば、迷惑だと思われたい。でも、わからないことがそのまま積み重ねっていくことのストレスは大きい。だから目が泳ぐのでしょうか。



なら、これでいいのだと思えるように一工夫したいところです。着いてきてという指示に応えられたのなら、「すぐに動いてくれてありがとう。次は〇〇の教室に行くよ」と声かけをしたら、見通しが持ちやすくなると感じます。

力を伸ばす

ある母に質問すると答えが微妙にズレる事がありました。修正して聞き直しても、そのズレが修復されない。しっかり話をされる方だけど、上手くコミュニケーションが取れないことが続くと、にこやかな雰囲気でなくなっていくます。警戒されているのかな、思い当たることはないけど何か私機嫌を損ねることをしてしまったのだろうか、何が起きているのだろうと思いながら話を続けていきました。

すると、子どもが2人いて別々の保育園に連れて行っている話題になり、私も子育てで奔走している頃を思い出し、

「大変ですよ。私も別々の保育園で、朝も晩も何でこんなに走らないとならないのだろうと思っていました」と伝えると、

「子どもは何歳差ですか？」と質問されました。

「うちは、2歳差です」

「うふふ」と笑顔になる母。

そこから母の表情が緩み、緊張もほどけていきました。何故、きょうだいの年齢差を聞いたかったのかわかりませんが、気持ちがほぐれて良かったです。

「療育手帳の申請は、どなたかに勧められたのですか？」

「私が療育手帳を持っているから持っている方がいいかなと思って相談したら、お母さんも知っているように手帳を持って不利になることはないからね。いろいろなサービスも受けられるしねと言われました。」

このお母さん、療育手帳をお持ちでした。

この方には、話し慣れている事柄があるようで、こちらの質問の意図を理解して答えているというより、いつも答え慣れていることを語っているのだとわかりました。だから質問の答えがズレていたようです。

最初警戒していたのは、相手は何を話すのか、高圧的に出るのか、話しやすい人なのかどうかを探られていたのかも知れません。大丈夫そうだとわかると、母としてできることをできるだけしていきたい、自分で子どもを守り育てていこうとしている姿を感じました。このお母さんは、周りの支援者を味方につけています。

当たり前のことですが、療育手帳を持ったからといって支援を受ける受け身に徹するわけではないことを再認識してもらいました。自分で考え、周りに相談をし、最後の決断をしています。他者を警戒することと警戒を解いて話し、相談してその意見を取り入れられることはこの方の力だと感心します。



迷惑とハラスメント

日本では、空気を乱さない、皆と同じでいること、迷惑をかけないことが大切にされていく社会です。先生の指示に従えることが評価されてきた時代がありましたが、個の尊重も重視されるようになってきました。ハラスメントという言葉が浸透して、不適切な言動をしない意識を持ってきています。不適切な言葉の例として

「何度教えてもわからないやつに教えるのは無駄だ」

「お前のせいでクラスの成績が下がる」

「男がメソメソするな」

「女のくせに生意気」

等があげられます。もちろん体罰も厳禁です。

私の子ども時代には、ほうきやバットでお尻を殴られる「ケツバット」なるものがありました。された後は、お尻に青あざができてとても痛かったのを覚えています。それを許容されていた時代は、今から見ると差別が横行していた社会なのだと感じます。人権侵害は許されてはいけませんが、どこまで他者に依頼していいのかは迷うようになりました。冗談も下手に言えばパワハラと訴えられるかも知れないと懸念する時代です。

迷惑をかけないこととハラスメントは対極にありますが、どちらも気にしすぎるとコミュニケーションを妨害します。子どもが親に迷惑をかけたくないと言い、親の方は何かあれば頼って欲しいと期待しているものです。子どもの本心は、親に頼れば後でパワハラ的なことを言われるかも知れないと近づきたくないのかも知れません。迷惑をかけられるのは嫌だと感じる時は、これ以上私に負担をかけないでと余裕がなくなっているのでしょう。

迷惑と助け合いは紙一重です。誰も独りで生きていくことはできません。同じ行動でも迷惑だと感じるのなら自分の置かれている環境を問い直すことが先なのかもしれません。この子の将来に役立てると思える状況なら、それは思いやりに変わります。自分自身が物語をどう紡いでいこうとしているか問うてみると、相手にだけでなく自分に対しても気持ちが楽になるのではないのでしょうか。